

「植村環の悲嘆と信仰―愛する者との死別を通して」

東北学院大学非常勤講師 松 本 のぞみ

序

植村環（1890～1982）は佐幕派の武士の子から日本初代のプロテスタント・キリスト教会牧師となった植村正久と文明開化のキリスト教学校（フェリス女学院）教育を受けた季野との間に三女として誕生し、この父母の影響を強く受けて女子学院中学部3年生の時に日本基督教会・一番町教会（富士見町教会となる）にて洗礼を受けた。米国マサチューセッツ・ウェルズレー大学（聖書・哲学専攻）留学、結婚、家族（夫、長男、妹、父）の相次ぐ死別を経て牧師を志した。スコットランド、エディンバラ・ニューカレッジ神学校及びエディンバラ大学神学部留学、BD（神学士）を取得し、日本プロテスタント史「第二号の女性牧師」（『女性教職の歴史』日本基督教団出版局）となった環は柏木教会を牧会するかたわら第二次世界大戦と敗戦を経験した。敗戦後日本人として招かれて、最初の渡米者となり、国家公安委員、日本YWCA（女子青年キリスト者アソシエーション）会長など歴任した¹。

本稿は植村環の牧師としての志に至るまでに経験した「愛する者との死別」に焦点を当てて考察を試みる。

「主の前に男女なし」の人間観

環と親交のあった武田清子（1917～2018）のインタビューを記事にした『Ministry』特集『植村環物語』は、未だ男性の牧師しかいない時代に植村環が牧師として誕生したことに影響している第一のこととして、正久の「主の前に男女なし」の人間観をあげ、次のように記している。

「植村正久。彼は日本プロテスタント初期の中心的指導者であるとともに、女性解放の立役者でもあった。『主の前に男女なし』として、女性の社会参加を促した。正久によって導かれ、世に羽ばたいたのは、矢島梶子、羽仁もと子、河合道と牧挙にいとまがない。さらに正久は、男女共学の東京神学社を設立するなど、男性にのみ許されていた牧師への道を女性にも拓くことになる。当時、女性が牧師になることは、世界でも例を見ない『事件』だった。」²

ここでいう「主の前に男女なし」とは聖書の示す「洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。そこではもはや……男も女もありません」（ガラテヤの信

¹ 植村環『植村環著作集 3』植村環牧師記念出版委員会編、新教出版社、1985年、407頁。

² 猪俣沙織編「植村環物語」『Ministry』キリスト新聞社、2010年7月10日発行、19頁。

徒への手紙 3：27～28〈新共同訳〉）というイエス・キリストによる「神の前に平等」の人間観を意味する。

教育の原点

環が生まれた年は「教育勅語」発布（1890）の年である。明治政府が「教育勅語」により天皇制国家の道徳上の大本を立てる時代にあつて、環の教育の原点には父母による家庭教育があつた。それは具体的には環をキリストの贖罪へと導く信仰教育であつた。環は自身の信仰の原点である洗礼に至る回心を「コンヴァージョン（conversion 心の動きが変わること）」³と呼んでいる。コンヴァージョンはキリスト教の「罪の赦し」を基盤とし、聖書において「悔い改め」、「回心」と訳された言葉、μετάνοια（メタノイア）の「向き直る」、「振り返る」、「戻る」との意味に基づいている。それは環の父である正久⁴が横浜バンドの初週祈禱会で、「天の父」と呼ばれる神と向き合う祈りにおいて、聖霊（神の霊）の働きに押し出され、その宗教心が「主（キリスト）に対する忠義の心」⁵へと心の動きが変わり、洗礼へと導かれたようにである。環の信仰へのコンヴァージョンは洗礼の出来事に示される型であり、その仕方において神（父・子・聖霊）が主権的である。それは洗礼の出来事を通して環の生涯すべてが「神のためのみの生命」⁶、「キリストに一生を捧げる決心」⁷へとコンヴァージョンさせられる「新生」⁸を意味する。

愛する者の「死」との向き合い方

環は愛する者の「死」との向き合い方を父母の信仰姿勢から学んでいる。それは環が2歳の時に遡る。正久と季野の築いたキリスト教的家庭の内実は、礼拝（聖書）と祈りの教会生活を日常とするものであつた。環によれば、「正久は祈禱の人」⁹、季野は「祈禱のうちに聖められた愛」¹⁰の人であり、正久は電車の中で祈り、環と並んで歩きながら祈り、寢床の上で正座をして祈り、家庭礼拝で祈つた。その祈りの生活は次女薫の今際の時にも及んだ。薫は毛細気管支炎で入院し、その危篤状態の或る日、近所から発火して、病院は猛火に包まれたが、正久と季野は薫の枕元に正座し、「御旨のままに成させたまえ」と祈っていた。火はやがて鎮まったが、薫は間もなく召された。その臨終の祈りでは、薫は「アーメン」と声を合わせた¹¹。「アーメン」とは「真実である」、「まちがいはありません、そのとおりです」¹²という意味であり、祈りにおいて「神のアーメンを聞いてそれに対してアー

³ 植村環『父母とわれら』新教出版社、1966年、151頁。

⁴ その頃のことを正久は「神道が宗旨であつたので、私は、身を鍛冶屋から起して偉大な軍人とも愛国者ともなつた〔加藤清正〕の祠に祈願を込めて参詣したが、それは同じやうに立身出世したいためであつた」（齊藤勇編「自叙伝」（齊藤勇訳）『植村正久文集』岩波文庫、1995年、208頁）と述べている。

⁵ 植村正久「主の祈り」1912年、『植村正久著作集第5巻』新教出版社、1966年、298頁。

⁶ 『父母とわれら』40頁。

⁷ 『父母とわれら』151頁。

⁸ 『植村環著作集3』202頁。

⁹ 『父母とわれら』142頁。

¹⁰ 『父母とわれら』135頁。

¹¹ 『父母とわれら』17頁。

メンという応えをすることができるようになる、これが、私どものほんとうの祈り」¹³と環は語る。薫を看取る正久と季野のあり方はのちに環が愛する者を看取るあり方として継承されることになる。

山上の垂訓による倫理教育

環の洗礼までの準備段階は父母のイエス・キリストの山上の垂訓による倫理教育からはじまっている。具体的には、「天の父」と呼ばれる神に向き合う祈りと、聖書の神の国と義を示す「イエス・キリストの山の上の垂訓」の、「心の中でなされた悪い思いは、行動に出た悪いことと同じくいけない」¹⁴という教えに基く倫理教育であった。「イエス・キリストの山の上の垂訓」の基本には「聖にして義なる」神がモーセを通して民に宣言した「十誡」の「戒律」、「盗むなかれ」、「隣人のものを食べるなかれ」、「虚妄の証拠（偽証）をたつるなかれ」、「殺すなかれ」、「姦淫するなかれ」、「汝の父母を敬え」、「汝我の他何物をも神とすべからず」、「エホバ（神）の名を妄に口にあらべからず」、「安息日（聖日）を憶えてこれをきよくすべし」¹⁵（文語体聖書）等がある。正久は環が嘘をつく行為（偽証してはならない戒めに反する）を見つけると体罰を加えた。それに対し季野は環に正久の怒りを丁寧に説明し、太陽の光の中に見えるほこりの柱を指して、「イエス様のお目には悪いこと、きたないことが、みんなあのほこりの柱のように、あきらかに見えるのですよ」¹⁶と戒めた。それは必然的に環を神に向き合う祈りへ導き、同時に「イエス・キリストの山の上の垂訓」に照らし合わせて「心の中でなされた悪い思い」を悔いる「幼き罪」¹⁷の自覚を促した。

宣教師の「死」と「友情の破綻」

環は洗礼までの準備段階において、①人間には罪（十誡〈心の中まで〉に生きられない）があり、②それは神のほか、解決できない、③それを解決するキリストの贖罪〈罪の赦し、罪からの解放〉を基盤とするしか神と人との和解も人と人との和解もないという贖罪理解に達した¹⁸。この③に達する過程において、女子学院中学部に入学した環はそれまでの父母による教えをただ律法主義的あるいは教訓的に受け止めるだけではやっていけなくなり、『太平記』や『平家物語』等の日本文学から影響を受け、「諸行無常、会者定離」¹⁹の思想に心を捕えられた。そのような内的経験の中で環は憧れの宣教師エマ・アレキサンダーの「死」と「友情の破綻」²⁰という実存的問題に直面した。

エマ宣教師はハワイで死別した父の志であるキリスト教宣教の志を受け継いで日本に来た。環はそ

¹² 植村環『植村環著作集 1』植村環牧師記念出版委員会編、新教出版社、1983年、432頁。

¹³ 『植村環著作集 1』441頁。

¹⁴ 『父母とわれら』149頁。

¹⁵ 植村環『植村環著作集 2』植村環牧師記念出版委員会編、新教出版社、1984年、100頁。

¹⁶ 『父母とわれら』149頁。

¹⁷ 『父母とわれら』13頁。

¹⁸ 環はそのことを段階的に①を「第一階段」、②を「第二階段」、③を「第三階段」と呼んでいる（『植村環著作集 1』347頁）。環の「第三階段」に改革派キリスト教神学の伝統、ジャン・カルヴァンの律法（十誡）の「第三用法」を看取できる。

¹⁹ 『父母とわれら』37頁。

²⁰ 『父母とわれら』38頁。

の志に励まされ、その生き方に「真の美」²¹を見出していた。環にとってエマ宣教師の「死」は「諸行無常、会者定離」の思想では「人生のはかなさ」、「厭世」²²を意味した。しかしその一方で環は「私にとっては、その悲しみが刺激となって、信仰順に進んだ」²³と述べている。さらに同時期、環は「一年年長の美しい聡明な友人」から「絶交」を申し渡され「友情の破綻」を経験した。その友人は環より4、5歳上の「校内切っての才嬢への友情」を選び、環とは「絶交という妙な決心をした」²⁴のである。その問題は「諸行無常、会者定離」といった思想で受け止めようとすると苦しくなり、「友情の破綻から、急に信仰への速度を増した」²⁵と環は述懐する。

環を「信仰」へと向かわせたもの

この時、環を「信仰」へと向かわせたものは神との垂直的人格関係における祈りであった。環は季野の勧めで日本基督教会・一番町教会の幼馴染の友人、渡辺貞（石原謙の妻）と「祈り会」を共にし、毎朝共に聖書を読み、祈りをなした。それは以前のように、「山上の垂訓」の教えを父母から律法主義的教訓的に聞くものではなく、その教えの中核にある神と向き合う祈りによって贖罪者イエス・キリストに罪と死からの救済を求めるものであった。ここには、環が幼少期から父母より受けた信仰教育から体験的、直感的に受け継いだキリストの贖罪（罪の赦し）への気づきがある。

1905年の春、環（16歳）と貞（17歳）は「洗礼を受けずにはいられなくなって、進んで志願」²⁶するに至った。洗礼の試問で、愛唱聖句と愛唱讃美歌を尋ねられ、2人は「キリスト・イエスの心を心とせよ」（ピリピ書二章五節〈文語体〉）と「我が主イエスよ ひたすら祈り求む愛をば 増させたまえ 主を愛する愛をば」（讃美歌）の2人とも同じ聖句と讃美歌を挙げた。それは「祈り会」で2人が向かったものがキリストの贖罪であり、キリストの贖罪により「キリストの心を心とし、キリストを愛する」信仰を神に祈り求めたことをあらわしている。

洗礼の出来事

信仰の生起となる洗礼の出来事について環は次のように記す。

「罪の問題が解決せられ、主の聖なる交わりが確保せられ、永遠の生命が獲得せられたことを信じた時、私の今までの悲しみ、今までの悩み、今までの失望、今までの寂しさは皆除外せられて、悦びと力、愛と希望にみたまされたのである。その後は神のためのみの生命であらねばならぬと決心した。」²⁷

²¹ 『父母とわれら』38頁。

²² 『父母とわれら』38頁。

²³ 『植村環著作集3』292頁。

²⁴ 『父母とわれら』38頁。

²⁵ 『父母とわれら』38頁。

²⁶ 『父母とわれら』39頁。

²⁷ 『父母とわれら』40頁。

洗礼に至るまでの環は、父母による礼拝と祈りの教会生活とイエス・キリストの山上の垂訓を通して聖書の神を知らされていたが、その中核にあるキリストの贖罪により神に結ばれる信仰によって神（父・子・聖霊）を知るまでには至っていなかった。洗礼の出来事でキリストの贖罪により神に結ばれるまでの環の心は、神（父・子・聖霊）と離反し、その「罪」の問題から生ずる不安、神との繋がりを失った人間愛の破綻、「主の聖なる交わり（父・子・聖霊なる神との交わり）」、「永遠の生命」から疎外された人間の生の限界である「死」の孤独や寂しさを抱えていたことがわかる。後に環は「人間は神を知るまでは、神を得るまでは、休みがない。これはアウグスティヌスが言った言葉ですね。事実その通りでしょう」²⁸と教父アウグスティヌスの言葉と重ね合わせて告白している。

信仰において知識を求める姿勢—自らの生き方（結婚・職業）

ここから環の人生の半ばまでに経験した家族との死別を見るにあたって、少し立ち入って環の結婚と職業について触れておきたい。環にとって「信仰において知識を求める」姿勢は、自らの生き方、結婚や職業をも、神の前に点検し、自らの考えを神の考え（贖罪者キリストの良心）に従わせようとする悔い改めの信仰の姿勢であり、それは環のキリスト者としての人格形成の基軸として据えられていくものであった。

まず「神のみのための生命」へとコンヴァージョンさせられた16歳の環はその後「信ずるキリストに一生を捧げる決心」²⁹をし、医者として医療活動を通してハンセン病患者への伝道をすることを目指した³⁰。「女子学院の方針」は「教会主義」であり、「信仰にはいるということは教会に行き、教会の会員としてあらゆる義務を尽くすことと結びついていた」と環は述べ、「預言者的、詩人的なキャンベル先生の聖書のクラスや英文学の御講義は、いささか後期に属するが、私は、この方を通して、伝道者となる決心を進められたといってもよい」³¹とキャンベル宣教師による感化から伝道者を志したことを明かしている。ただし、この時の環が志した「伝道者」は医療活動を通して伝道することであった。

進路変更

環は正久に「自分をらい者（ママ）の伝道者にやってくれるよう」頼むと正久は環が「情熱のままに振舞うことを恐れ」、「祈って考えてごらん」³²と勧めた。その祈りの期間において、環は女子学院高等科卒業論文で信仰と知識の比較（テニスン の追悼詩第1章6節 A Beam in Darkness）を研究し、「信仰と知識が手を取り合って進み行く人生」、「どこまでも信仰において知識を求める決心」³³をした。その後環はウェルズレー大学において医学への第一歩を踏み出したが、「解剖と顕微鏡の仕事」

²⁸『植村環著作集 1』237頁。

²⁹『父母とわれら』151頁。

³⁰『父母とわれら』40頁。

³¹『植村環著作集 3』292頁。

³²『父母とわれら』40頁。

³³『父母とわれら』57頁。

が不得意だったため、「その方面の専門になるだけの天分を発見しなかった」³⁴と認識した。そして他に興味のあった「聖書と哲学」³⁵の専攻へと方向転換した。このように医学への道を断念し、ウェルズレー大学を中途退学するのではなく、結果的に医学から「聖書と哲学」へ専攻の進路を変更したことが、後の環にとって牧師の志を立てる準備段階となった。

婚約生活

その間、アメリカ留学前の環に、日本基督教会・富士見町教会（一番町教会）の日曜学校で一緒に奉仕活動をしていた川戸洲三（富士見町教会長老、日曜学校校長、芝浦製作所に勤めるエンジニア）より、両親を介して結婚の申込があった。女子学院の寮生活を終えて帰宅した環は父母から「川戸洲三氏より環さんに結婚の申込があるから、祈って返事をしなさい。父さん母さんは誠に良縁だと思う。あとはお前が祈って定めるまでの事」と勧められた。環は「毎日祈って御旨を伺っていた」結果、「おあつらえ向き」の「神の応答が聞こえて来ぬ」まま婚約式の日を迎えた。そして「父母に絶対の信頼を置いていたし、川戸は尊敬すべき人であったので、このことが必ず神の御旨と信じて、婚約の生活に入った」³⁶のである。この環の神に「御旨を伺っていた」という神に向き合う祈りは「おあつらえ向き」の人間の理性を超えた神に信頼する信仰において知識を求める姿勢を意味する。しかしこの時点では環は神の応答が聞えぬまま、父母に対する信頼故に川戸と婚約したことがわかる。川戸もまた、環より先にその両親に信頼を寄せて結婚の申込をしている。この場合、環はクリスチャン・ホームの父母に対する絶対的信頼故に、川戸との結婚を神の御旨と信じることにしたが、神と親は同質ではない。これまでの環にとって神を敬い従う「忠」と親を愛し敬う「孝」が一致していたが、川戸との結婚に対しては神の応答が聞えぬまま「忠孝のジレンマ」を抱えて婚約生活に入ることとなった。

心境の変化

環のアメリカ留学中、婚約者の川戸洲三は勤務先の芝浦製作所から米国スケネクタデーのジェネラル・エレクトリック会社に派遣され、2年近くエンジニアの研究をしていた。環は川戸と再会し、「私どもはたびたび会って、一層相互を知る機会を与えられた。同時に私に一つの心境の変化が経験せられた」³⁷と述べている。それは環が自覚的に神との関係性において川戸との結婚を再確認する期間を持ちたいというものであった。この「心境の変化」は「忠孝のジレンマ」を抱えていた環によって信仰の試練となった。

環は神との関係性において「川戸に対して持っている信頼故に、この心境を打ち明け、婚約を一時解消してくれるように頼」み、「実際、自分は私どもの友情を感謝しつつ独身で神の国の業に与らせていただきたいものとの願いさえ感じていた」³⁸と覚悟を決めている。すると川戸も環の「心境の変

³⁴『父母とわれら』67頁。

³⁵『父母とわれら』67頁。

³⁶『父母とわれら』58頁。

³⁷『父母とわれら』73頁。

³⁸『父母とわれら』73～74頁。

化」を受け容れ、4ヵ月間、互いに結婚について考えぬいた結果「確かな愛の自覚」が芽生え、「責任と使命の意識」³⁹を伴うようになった。このことは環が神との関係性において父母から独立し、川戸と結婚観を共有したことをあらわしている。

結婚生活

環はアメリカ留学帰国後、病身の川戸が全快するまでの2年間、結婚を延長し、女子英学塾（津田英学塾）と女子学院で教鞭をとり、その後2人は結婚した（1918）。その時の喜びについて、環は「信仰において一つであり、心相通じる二人が健康においてなんの故障もない状態で家庭をつくった」、「そこにはなんの不足も欠乏もなく、ただ悦びと感謝と決心とのみがあった」⁴⁰と語っている。そして環（26歳）と洲三（32歳）は、結婚後間もなく自宅を開放して日曜日午後の礼拝に宛て、説教者に正久を含む牧師を迎え、そのうち近所に家を借家して、午前礼拝を始めている⁴¹。日本基督教会・富士見町教会では、洲三は長老と日曜学校校長を務め、環は女子青年会を担った。そしてウィーク・デーは、洲三はエンジニアとして芝浦製作所の機械の発明に身心を打ち込み、毎夜12時頃まで勉強や事務をし、環も机を向かい合って同時に勉強をし、「二人は祈りを朝夕ともにし、二人を通してみ栄を顕わしたまえと祈った」⁴²と語る。

家族との死別を経て

その後29から35歳（1919～1925）にかけて、環は次々に愛する家族と死別し、その悲しみを経て牧師となる志を立てる決断に至った。

7年間の婚約期間を経て環と洲三は結婚したが、長女俣が誕生すると間もなく、洲三は脳の癌で頭痛を訴え、手術後、1919年6月に死去した。「信仰において一つであり、心相通ずる」洲三との死別は環にとって悲痛な出来事であった。この時、環は身ごもっており、身重な苦しみが急に心身を圧迫し、「あらゆる気力、あらゆる張り合いは消失し、昼夜懊悩、苦悶であった。激しい性質の者の悲しみは外から見ても怖ろしいものであったらしく、同じ悲しみをもっと静かに経験していた姑は、『環さん、環さん、能く分かるよ、よく分かるよ』と背をさすって下された」⁴³と述懐している。夫の最期を看取る出来事は環の生涯のなかで最も激しく心身の苦しみを覚える出来事であった。環の人生でこれほど涙したことはなかったであろう。環は洲三の死を「天国に旅立った」⁴⁴と受け止めている。

その5ヶ月後に長男晴彦が誕生した。晴彦は3歳の時に小児麻痺にかかり、環は晴彦の治療に専念し、「あの子〔晴彦〕を背負っては鍼医や、電気治療、マッサージに通った」、姑や俣と一緒に「東北の釜先〔鎌先温泉〕という温泉場にも連れていった」⁴⁵という。けれども晴彦は5歳の時に疫病に

³⁹ 『父母とわれら』73～74頁。

⁴⁰ 『植村環著作集3』93頁。

⁴¹ 山本菊子編『豊かな恵みへー女性教職の歴史』日本基督教団出版局、1995年、71頁。

⁴² 『植村環著作集3』94～95頁。

⁴³ 『父母とわれら』89頁。

⁴⁴ 『父母とわれら』88頁。

⁴⁵ 『父母とわれら』98～99頁。

侵され、死の間際、環の祈りの言葉に促され、「アーメン」と唱和し、環の胸の中で召されていった（1923）⁴⁶。環は晴彦について「彼は私の宝であった。今でも私は天に宝を蓄えてある心地がする。足の悪い晴彦を、恵み深い天の父は、天で健やかにし、美しく成長させてくださったことを感謝する。そして彼はまだ見なかった地上の父にも愛せられていることだろう」⁴⁷と受け止めている。ここには、環の家族への思慕が「天の父の家」に向けられている。

大変革

この同時期に米国ハートフォード神学校在学中であった妹恵子も結核に侵され死去していた（1922）。環は恵子を「親友であった妹」と呼び、環の「伝道の志を固める手伝いを立派にしてくれた天使である」⁴⁸と語る。恵子は女子英学塾（津田英学塾）、東京神学社卒業後、牧師となる志を立てて米国に留学し、死の直前、「この世に対する私の執着は、まだまだ強うございます。勿論死ぬるもまた益なりという、確信は持しておりますが、聖徒として生き、また死ぬるは容易な事ではないことを感じます」⁴⁹と家族に宛てた手紙に記している。この手紙から環は恵子が牧師となる志を「この世に対する執着」としていたと受け止め、恵子の死後「自分は妹の代わりを務めるべきではないか」⁵⁰と考えるようになった。恵子の死の出来事が環の「心到大変革を起こした」⁵¹のである。この「大変革」は環の信仰の出発点（洗礼）で志した伝道の志の「大変革」でもあった。

牧師としての「召命観」

環が洗礼を受けた頃の日本基督教会は未だ女性の牧師が立てられていない状況にあり、環はアメリカ人女性宣教師（信徒伝道者）らのように牧師以外の職業で伝道を目指した。他方、恵子は牧師として伝道者となる志を持って米国ハートフォード神学校に留学した。恵子の牧師となる志は正久と季野、そして環の祈りの中に留められるものであった。「恵子の志を嗣ぐ」⁵²ことは、それまでの環の伝道の志が、牧師としての「召命観」⁵³へと変えられる「大変革」であった。牧師としての「召命観」は環ひとりの努力だけでは、到底獲得し得ぬ困難な出来事であり、動き出すまでには相次ぐ家族との死別と残された家族の祈りと協力があった。環は川戸や恵子の死の悲しみで弱っており、幼い子どもたちや年老いた姑、病身の季野を抱えていたので、「はかばかしい行動に出る」よりは「自分としていちばん行き易い教育の道に進むことが最高だ」⁵⁴と考えていたが、そのところに晴彦の死があり、更にその2年後に正久が死去する出来事が起きた（1925）。その時、季野は環に向かって、「これで

⁴⁶ 『父母とわれら』102頁。

⁴⁷ 『父母とわれら』102頁。

⁴⁸ 『父母とわれら』31頁。

⁴⁹ 『父母とわれら』96頁。

⁵⁰ 柏木教会歴史編纂委員会『日本基督教会 柏木教会六十年史』新教出版社、1991年、4頁。

⁵¹ 『父母とわれら』153～154頁。

⁵² 『父母とわれら』154頁。

⁵³ 『植村環著作集2』301頁。

⁵⁴ 『父母とわれら』154頁。

日本には伝道者（牧師）の数が一人へりました。あなたは伝道者として立ちませんか⁵⁵と呼びかけたのである。環は季野の言葉に十分共鳴はしたものの、家族を看ている自分の立場を考えると、なかなか決心がつかずにいた。しかし季野の「主が自分に孫を看るだけの力を下さると信じる。正久のいただいた弔慰金を全部用いれば、旅費と四年間くらいの学費にはさほど困るまい⁵⁶」という言葉に決断せざるを得なくさせられたのである。俟も環の決断を幼いながらに受け容れた⁵⁷。

女性牧師の誕生—2 人の按手

環（35歳）は季野に長女俟を預け、スコットランドのエディンバラ・ニューカレッジ神学校及びエディンバラ大学神学部で4年間（1925～1929）学び、ヒュー・ロス・マッキントッシュ⁵⁸からキリストの贖罪を中心とした改革派キリスト教神学を学んだ。

1929年に帰国した環は、季野が死去（1930）するまでの7ヶ月間、季野の指導により説教の練習をした。正久の説教の最もよき聴き手であった季野は、「病床にあっても娘環に枕元で説教の練習をさせ、色々と批評をし言葉づかいまで指導して、娘が伝道者（牧師）として立つ日を望み見ていた⁵⁹」ようである。1930年に環（40歳）の自宅で開始された家庭集会は、1932年のペンテコステ（聖霊降臨日）礼拝に出席者25名となり、日本基督柏木伝道会として設立し、やがて新会堂が建設され、日本基督教会・柏木教会（1937）へと発展した⁶⁰。

その間、1934年に環は日本基督公会発祥の横浜海岸教会で按手礼を受けた⁶¹。既にその4ヶ月前、日本基督教会で最初の女性牧師となった高橋久野が「あたかも当然のごとくに、特別な論争もなく⁶²」按手礼を受けており、環の場合も同じであった。このように日本で最初に女性が牧師となることに對し、何の「論争」もなかったということは海外の事例と比較すると異例であった。なぜなら、環の留学先であったエディンバラ神学大学の位置するスコットランドでは、1965年においても教会に女性長老は存在せず、したがって女性牧師もいないという状況⁶³であったからである。

女性牧師誕生までの過程

正久は日本で最初に女性が長老になることを提案し、1889年に日本基督教会・一番町教会（富士見町教会）では女性長老1人、女性執事1人を選出した。けれども1889年の日本基督教会東京中会では女性執事を置くことは可でも、女性長老を置くことは不可とした。1907年の東京中会でも再び同じことが起こった。そしてそれは外国ミッションの「宣教師らの頑強な保守主義から出た事情であっ

⁵⁵ 『父母とわれら』154頁。

⁵⁶ 『日本基督教会 柏木教会六十年史』4頁。

⁵⁷ 『父母とわれら』155頁。

⁵⁸ 『日本基督教会 柏木教会六十年史』6頁。環は「組織神学あるいは系統神学を教えられた」、「マ教授」（マッキントッシュ）より「主イエス・キリストの贖罪」というテーマの講義を受けた（『植村環著作集 1』290頁）。

⁵⁹ 『日本の説教10植村環』224頁。

⁶⁰ 『日本基督教会 柏木教会六十年史』10頁。

⁶¹ 「その後、厳かに『出席教師按手のもとに』任職式が執り行われた」（『豊かな恵みへ—女性教職の歴史』50頁）。

⁶² 古屋安雄『日本のキリスト教』教文館、2003年、222頁。

⁶³ 『植村環著作集 2』301頁。

たのだ」⁶⁴と環は述べている。日本基督教会の大会は各中会の決議を集めて行動するものなので、中会の半数が反対であれば、いかなる案も通過させることができない。しかしその後も一番町教会は相変わらず、女性長老を置き続け、女性が長老になる提案を正久は強く推した。「彼〔正久〕はさらに婦人教職（牧師）の夢さえ見ている」、「正久の婦人教職賛成論は、既に、明治二十四年（一八九一年）において、その発表を見ている」⁶⁵と環は語る。正久は1905年に男女共学の東京神学社を創立した⁶⁶。「婦人科」では教会の婦人会や教会学校に奉仕する女性信徒を養成した。現代的視点からは「女性」の役割を固定化しているとの批判も成り立つ。ただし、先に述べたような正久の姿勢からすれば、むしろ女性の役割の積極的推進であった。さらに男性の教職（牧師）志望者と同じ課程を履修する女性の信徒伝道者を養成した。環の妹恵子はこの伝道者養成課程に在籍していた⁶⁷。このような過程を経て日本基督教会は1933年に日本で最初に女性が牧師になることに対して「あたかも当然のごとくに、特別な論争もなかった」ことが窺える。

独身の覚悟

後に環は女性が牧師となることに対し「教会というものは、一体どちらかというと保守的な傾向を有するものである」、「パウロがテモテへの第一の手紙二・一二に、婦人は公会において語ることを許されないと申し立てていることに、こだわっているのである。しかし、その時代と現代は事情が異なるのだから、長老にはいうに及ばず、教職（牧師）にでも、特殊の召命を感じる婦人を許して悪いはずはない」⁶⁸と指摘している。その一方で未だ保守的な傾向にある日本基督教会の状況を知る環は「余程の召命観がなければ、婦人は牧師職を思い切る（ママ）方がよいと思う。原則として、婦人伝道者（牧師）は独身を覚悟すべきであるし、婦人の柔軟さが、牧師に向かない向きもある。男子教職（牧師）が妻を求める場合にも、神学を専攻した婦人よりも信仰厚きのみならず、家事家計のことに能力がある婦人が適わしいかもしれない」⁶⁹と語る。当時の社会で一般的に共有されていた「女性観」が表現されている文面ではあるが、これは環が身をもって経験したことであり、未だ男性依存に傾きやすい日本社会の傾向をキリスト教会も内包している状況をあらわしている。

説教者・牧会者として

環の傍らで6年間（1967～1973年、柏木教会伝道師・副牧師）⁷⁰共に働いた久保義宣は、環の「人生の半ばまでに経験した多様で悲痛な人生経験をとおして、誰よりも多くの苦悩、悲しみを得たことが、誰にも増して悲しむ者と共に悲しみ、苦悩の深淵にある者を励まし導くことのできる説教者・牧

⁶⁴『植村環著作集 3』254頁。

⁶⁵『植村環著作集 3』254頁。

⁶⁶「日本基督教会大会（明治三十七〈1904〉年、明治三十八〈1905〉年）は、激しい討論の末、ついに外国ミッションから独立することを決議した」（『植村環著作集 2』302頁）。

⁶⁷「日本基督教会では一九〇五年（明治三十八年）に東京神学社が創立され」、「植村恵子は正科卒業後、ハートフォード神学校に学んだが、卒業寸前、ニューヨークで死去した」（『植村環著作集 2』300頁）。

⁶⁸『植村環著作集 2』301頁。

⁶⁹『植村環著作集 2』301頁。

⁷⁰『日本基督教会 柏木教会六十年史』236頁。

会者また伝道者（牧師）としての良き働きをすることのできた道備えとなった」⁷¹と受け止めている。そのことは次のような環の説教（コリント後書一二章九節〈文語体〉）の言葉からも窺うことができる。

「もし、弱みより発して、正直なる認識、救いたもう御方への信頼、その指揮下の善戦、そして勝利に達するとせば、弱きことは実に恩寵の機会である。弱さを正しく認識することは、辛く寂しきことである。しかし、この段階を経ずしては、信頼も勝利もない。……けれど、われらは何よりも先ず、神の子たらんこと、贖われ救われることへの渴望と欲求を胸に懐く。なぜならば、われらは既に栄光の主を見た。神の独り子の聖姿の前に、われらは己らの暗愚と醜惡とを認識せざるを得ないのである。そして彼の聖愛が、われらに提供する恩寵を感謝して受けねばおられなくなる。」⁷²

環は人間存在を「罪」と共に「弱さ」を持つ者として捉えた。かつて女学生時代の環は、「宣教師の死」や「友情の破綻」を経験し、人間の「裏切り」、「別離」や「死」から生じる不安、孤独、人生の実存的意味の喪失について悩み苦しんだ。そして「裏切り」、「別離」、「死」を「罪」の問題として捉えた。その後、環は人生半ばまでに経験した家族との死別の悲しみを経て、「別離」や「死」に対し、悲しむ以外どうすることもできない「辛く寂しき」人間存在を「弱さ」を持つ者として受け止めた。すなわち、環は人間存在の「辛く寂しきこと」を「罪」の問題として捉えるだけでなく、「弱さ」としても捉えていたと理解できる。この「弱さ」から「救い出したもう御方への信頼」、贖罪信仰が環を奮い立たせ、牧師となるまでに至らせた。故に環は「弱きことは実に恩寵の機会である」と語る。そして人間が「弱さ」を持っているという「正直なる認識」により、「贖われ救われることへの渴望と要求を胸に懐」き、「救い出したもう御方への信頼」から、神の独り子の「恩寵を感謝して受けねばおられなくなる」と説く。それは愛する者たちの死をはじめ「多くの苦悩、悲しみを得た」環であるからこそ、語り得た「弱さ」であり、そこから救い出されたキリスト者として、「悲しむ者と共に悲しみ、苦悩の深淵にある者を励まし導くことのできる説教者」であったと捉えることができる。

牧師としての環の「秘められた涙」

島崎光正が著書『私の旅路』の一節で記すエピソードから、環の牧師としての側面に触れておきたい。島崎は太平洋戦争の終わった3年目（1948）の夏、松本日本基督教会（今日の日本基督教団松本東教会）から応援の要請を受けた環の司式により洗礼を受けた⁷³。それは敗戦後、環の社会的活動が多忙を極めたばかりでなく、伝道の面でも全国各地の諸教会から応援の要請を受けていた時期である⁷⁴。洗礼を受ける時、島崎は3人の兄弟と共に礼拝の場の前に座った。そして洗礼の式に移った

⁷¹ 『日本の説教10植村環』224頁。

⁷² 「わが力は弱きうちに全うせらる」1940年、『日本の説教10植村環』16頁。

⁷³ 島崎光正『私の旅路』ぶどう社、1992年、69頁。

⁷⁴ 『日本の説教10植村環』231頁。

時、他の3人の兄弟は何れも畳の上に立ち上がったが、足のきかなかった島崎は座ったままだった。その様子に気付いた環は、礼拝が終ってから島崎のそばへ来て座り、足をわずらっていたフランスの或る伝道者の名前を言い、「立派な人になりましたよ」と声をかけ、島崎は「先生〔環〕自身、小児マヒをわずらいながら早くに亡くなった次男のあることを、私は知った」⁷⁵と記し、環が自身の息子晴彦と島崎の姿を重ね合わせたと捉えている。さらに島崎は環との出会いを通して「威風堂々としたものを先生〔環〕の上に覚えながら、しかし同時に、その底に秘められた涙をいつか感じとっていた」、「若い日に川戸洲三氏と結婚をし、いくばくもなく死別したこともあとから知ったからだだった。その時、先生は号泣し、姑から慰められた話を私は『父母とわれら』（新教出版社）で読んだ」⁷⁶と記す。島崎が環のなかに感じ取っていた「秘められた涙」が、病を抱えつつ生きた島崎の人生に触れ合うものであったことが窺える。

島崎が証言する通り、環の伝道者としての出発には家族との死別における「秘められた涙」があった。環自身、「弱きことは実に恩寵の機会である」と語る。明治以来の「古来の社会伝統」、「家族制度」、「男子中心の思想」⁷⁷を内包する日本のキリスト教会において、最初期に女性が牧師になることは、人間の弱さの中に働く神の恩寵による「余程の召命観」なくして有り得なかったであろう。「余程の召命観がなければ婦人は牧師職を思い切るほうがよい」、「婦人伝道者は独身を覚悟すべきであるし、婦人の柔和さが牧師に向かない向きもある」というのは環の実存をかけた言葉でもある。久保義宣が証言する通り、環の「人生の半ばまでに経験した多様で悲痛な人生経験をとおして、誰よりも多くの苦悩、悲しみを得たことが、誰にも増して悲しむ者と共に悲しみ、苦悩の深淵にある者を励まし導くことのできる説教者・牧会者また伝道者としての良き働きをすることのできた道備えとなった」ことが環の島崎への関わりからも窺い知ることができる。

「主の前に男女なし」と育てられた環の課題

本稿では直接に触れなかったが、「教育勅語」の時代に生まれた環が天皇（男性）を「家長」と見る天皇観は、環が批判する「古来の社会伝統」、「家族制度」、「男子中心の思想」を戦後日本のキリスト教会に内包する矛盾に繋がったと言える。第二次世界大戦後も環が「余程の召命観がなければ婦人は牧師職を思い切るほうがよい」、「婦人伝道者は独身を覚悟すべきであるし、婦人の柔和さが牧師に向かない向きもある」と述べているということは、天皇（男性）を「家長」として父性に依存する風潮がある「男子中心の思想」を内包する日本のキリスト教会のなかで女性が「牧師」として立つのは難しい状況を意味する。環の「婦人の柔和さ」＝「牧師に向かない向きもある」という考え方も「牧師」＝「男性牧師中心」を前提とするものであり、その考え方自体が、個々の女性牧師を「牧師」＝「男性牧師中心」とする男性依存に傾きやすい「婦人」（環を含む女性）という一類型に包括させ、個々の女性牧師の「人間性」や「牧師職」における個性を見失わせると共に「人間性」や「牧師職」における個性を個々の男性牧師に依存するかたちに行っている。「婦人の柔和さ」が「牧師に向かない向きも

⁷⁵ 『私の旅路』70頁。

⁷⁶ 『私の旅路』71頁。

⁷⁷ 植村環『燃ゆる火のごとく』日本YWCA、1960年、6～7頁。

ある」と突き放した環自身も戦後の男性依存に傾きやすい傾向から未だ解放されていないかのように見える。その要因の一つは、環自身が戦前戦後にわたって女性の自律を促す主張と、天皇（男性）を「家長」と見る天皇観とを重層的に保持し、両者の矛盾を意識していない点にあると思われる。人権としての信教の自由と天皇制を重層的に統一している点は戦前戦後にわたる日本が抱えている問題点でもある。現代における日本のキリスト教会にとって、環が本来目指そうとした、性別・人種・国境のへだてがない「主の前に男女なし」の「人格」を互いに尊重し合う「共同体性」、「公同性」を受け取り直し、目指されることが課題である。